

『戦略』と『戦術』

(石田三成の家来、島左近の言葉)

見附市教育センター 嘱託指導主事 外山 孝



「戦略」と「戦術」。最近ではビジネスやライフスタイルにおいても耳にすることがあります。では、この二つの違いは何でしょうか。

一般的に「戦略とは、物事を行う際の大局的かつ長期的な計画」、「戦術とは、その時々の対応の仕方や進め方」と言われています。

今年のNHK大河ドラマは「豊臣兄弟！」です。舞台は戦国時代。織田信長や豊臣秀吉、徳川家康など、多くの戦国大名が登場します。その一人である石田三成は、正義感の強い武将として現代でも人気があります。

司馬遼太郎の小説『関ヶ原』(下巻)の中に、次のような描写があります。

関ヶ原の戦いを前に、激しい駆け引きが繰り広げられる中、三成の家臣である島左近は、主君について密かにこう評しました。

「我が御大將は戦略家である。確かに、徳川家康を向こうに回して天下分け目の戦略を立てられるのは、石田三成をおいてほかにいないであろう。しかし、戦術家ではない……」

「三成に過ぎたるものが二つあり、島の左近に佐和山の城」と謳われるほど、島左近は優秀な武将でした。三成を慕い、心から我が大將と仰ぐ左近。しかし、そんな彼だからこそ「三成は戦略家だが、戦術家ではない」と冷静に見抜いていたのです。その真意はどこにあったのでしょうか。

この「戦略と戦術」を、日々の授業や教育活動に置き換えて考えてみます。

授業における「戦略」とは、「数時間の単元構想(プラン)や本時の展開案(プラン)」と言えます。教科書会社が作成した単元構想や、大勢の専門家が練り上げた一時間の授業の流れ、活動、教材などの計画(プラン)は、どれも非常に完成度が高いものです。

では、実際の授業において、当初の「戦略」のまま愚直に進めていくだけで良いのでしょうか。

今一度、関ヶ原の戦いに目を向けてみます。家康と三成の勝敗を分けたのは何だったのか。

その時々の自軍の動きを把握・分析し、敵軍にどう対処するかが「戦術」です。家康は自軍と三成軍の動きをリアルタイムに把握し、分析し、その都度作戦を変えて手を打ちました。まさに卓越した「戦術」です。

しかし三成は、当初に立てた「この策に間違いはない」という「戦略」にこだわりすぎてしまいました。

これを授業に置き換えると、授業での「戦術」とは、目の前のこどもに合わせた学習の流れ(単元構成)であり、一時間の授業の中における「教師の見取り(評価)と具体的な支援」にあたります。

日々の授業や教育活動において、私たちは計画(プラン)、つまり「戦略」にガチガチになっていないでしょうか。教科書だけを見つめて授業を進めてはいないでしょうか。もしそうなら、目の前のこどもが見えなくなり、こどもの学びを適切に見取ることができず、教師の支援も生かされなくなってしまう。

授業における「戦略と戦術」を磨くにはどうすればよいか。

基本に立ち返り、目の前のこどもを深く理解し、学習内容や提示する教材等を吟味する。その上で確かな「戦略」を立て、こどもの反応や学びを評価しながら、臨機応変に「戦術」を練る――。

この「戦略と戦術」のサイクルこそが、見附市教育委員会が大切にしている授業力向上策「『師がく』の10カ条」の土台である「児童生徒の一人一人の実態把握と日々の授業改善」につながるのだと考えます。

つながりと温もりが育む「見附の人づくり」

私たちがこどものころ、畑の先生や見守りパトロールなど、地域のあたたかな眼差しに支えられて学校生活を送った記憶はありませんか。「学力向上」は学校の専売特許と思われがちですが、実はこどもを取り巻く広義の人的環境、つまり人とのつながりこそが、豊かな知性を育む土台となっています。

教育社会学の分野では、家庭の所得や保護者の学歴などを合成した指標を「社会経済的背景(SES)」と呼び、学力との相関関係が広く知られています。しかし、耳塚寛明氏(元お茶の水女子大学副学長)らの「全国学力学習状況調査」を基盤とした大規模調査は、私たちに希望に満ちた示唆を与えてくれました。

厳しい環境にありながらも優れた学力を伸ばしているこどもや家庭には、明らかな特徴があることが分かったので。それが「生活習慣の安定」「読書習慣」「家庭での学習の対話」「保護者の学校行事への参加」という4つの要素でした。

これらは一見、漢方薬のように体質からじわじわと改善していくアプローチに見えますが、実は見附市が長年先駆的に進めてきた教育施策の視点と見事に合致しています。例えば、「早寝早起き朝ごはん」に代表される生活リズムの安定は、アンケートを通じた丁寧な現状把握によって支えられています。特色ある読書活動「見附の100冊」や、「見附市子育て教育の日」を契機とした親子の語り合いも、こどもたちの知的好奇心と心の安定を育むための確かな仕組みです。

そして、見附市が誇るべき最大の強みは、学校運営協議会や地域ボランティアといったコミュニティ・スクールの先進的な基盤にあります。これらは学術的には「ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)」と呼ばれ、地域の信頼関係やネットワークの豊かさを示す指標になります。親でも教師でもない、地域の大人が関わる「ななめの関係」があるからこそ、こどもたちは自分の居場所を実感し、安心して学習に向かうことができるのです。

「稲は足音を聞いて育つ」という言葉があります。田んぼに何度も足を運び、心を配る人がいるからこそ、稲は元気に黄金の穂を実らせます。これは物言わぬ植物だけでなく、未来を担うこどもたちにもまったく同じことが言えるはずです。学校で実施される授業の工夫——振り返りの充実や対話的な学び、きめ細かな少人数指導等々——に加え、保護者や地域が一体となってあたたかな「足音」を響かせることが、確かな学力向上へとつながっていきます。

こうした取組は、短期的なテストの点数だけを見れば、即効性は感じにくいかもしれません。しかし、こどもたちがやがて大人になり、次の世代の親となる長いスパンで見つめ直したとき、見附の教育風土が持つ本当の価値が見えてきます。点数で測れる「認知能力」の奥にある、生き方そのものを支える確かな根っこ。それらを保護者、地域、そして学校が三位一体となって育てていくことこそが、何よりの財産です。

見附市教育委員会が「見附18年教育」を掲げてきているように、人づくりは長いスパンで考えることが必要です。教職員として自分が直接かかわることができるのは、その一部になる場合がほとんどではないでしょうか。自分は第二走者、あるいは第三走者かな……。しっかり走って引き継いだバトンを次の走者に渡す、そんなイメージなのではないでしょうか。

「見附人はここがすごい」と誇れる持続可能な人づくりを、これからも広い視野で、長いスパンで、皆であたたかく、共に進めていきましょう。



4時から夢塾 今後の予定

8月 5日(水) 「インクルーシブ教育の推進 ver.2026」

長澤正樹先生(新潟大学名誉教授)

8月 24日(月) 「児童生徒が主役の授業づくりへ ～児童生徒の資質・能力を育成するための単元構想～」

比護智洋先生(教科教育専門監・数学 見附中学校)

8月 27日(木) 「保護者と連携して児童生徒のやる気と自信を伸ばす関わり方」

寺島幸優先生(公認心理師、MS 研究所認定講師、チャイルドラインにいがた代表)

9月 9日(水) 「学級経営Ⅱ 先生方の困り感に応える(オンライン)」

川崎智也先生(今町小学校)

9月 17日(木) 「どこまで生徒に委ねられますか？生徒の力を信じる英語授業へ」

鎌田雅俊先生(教科教育専門監・英語 見附中学校)



刈谷田川がつなぐ過去と未来 ——『流域治水』の担い手を育てる

名木野小学校の「草薙龍」の一場面です。(写真は広報みつけNo.748 から) 小仁舟(おにふ)神社の神楽を基にこどもたちが演じ始めて48年。すっきりとした展開とダイナミックな龍の動きが印象的です。この「龍」とは、かつて地域を脅かした刈谷田川を象徴しています。こどもたちの躍動感には、先人たちが力を結集して水害に立ち向かってきた決意が込められているように感じられます。見附の歴史は刈谷田川とその流域の治水を抜きに語ることはできません。先人たちは長い年月と莫大な労力を結集し、安心して暮らせる郷土を築いてきました。

江戸時代、見附は新発田藩・村松藩・長岡藩などに分割されていました。当時は各藩が自領の防衛に懸命で、災害時に他地域からの避難を受け入れなかったり、自領の堤防だけを高くして流域の他地域への影響を顧みなかったりすることがありました。「自分たちの地域だけは助かりたい」という心理が、かえって水害がなくならない最大の原因だったのです。これに一石を投じたのが、今町の学者・小泉蒼軒でした。彼は流域全体のメリット・デメリットを見据え、落としどころを探る論を展開しました。この「全体を考える」視点は、後年の大河津分水路建設の一つのベースとなりました。

実際のところ分水路建設は「廃藩置県」と「大正期の資金・技術」により結実したといえるでしょう。かつて3年に1度は大水害が起きるといわれ、大人の腰まで浸かる泥沼のような越後平野は、瞬く間に日本一の穀倉地帯へと生まれ変わりました。教科書では「廃藩置県＝中央集権化のステップ」として習いますが、実は新潟の人々にとっては、命がけだった治水論争にケリをつけ、郷土を水害から救ってくれた救世主的な大改革でもあったわけです。

時は流れ、平成16年の新潟福島豪雨(7.13水害)後、見附市は大規模な「遊水地」を計画しました。増水時に意図的に田んぼへ水を流し、下流域の負担を軽減する仕組みです。農作物の被害や泥の流入というリスクを伴うものでしたが、355人もの地権者が大局的な視点から同意し、完成した遊水地は平成23年豪雨で見事に力を発揮しました(現在の遊水地と田んぼダムの貯水量を合算すると、なんと刈谷田川ダムを上回ります)。

さて、もうこれで大丈夫かと思えた昨今ですが、新たな不安が膨らんでいます。地球温暖化により、直ちに二酸化炭素の排出量を抑えたとしても2050年まで地球の気温は上昇することが明らかになっています。気温が1℃上昇すると空気中に蓄えられた水蒸気量は約7%も増加し、この膨大な水分が記録的な線状降水帯やかつてない強さの台風をもたらします。

そのため「あふれること」を前提に備えていくことが求められ、その内容は5年前に「流域治水関連法」として成立しています。これまでは高い堤防を築き、水を閉じ込めていましたが、これからは「山～田んぼ～下流の街」に至るまで流域全体であらゆる場所に水を分散・保留し、あふれても被害を最小限に抑える形に変わっていきます。

これからの防災教育に必要なのは、単に避難行動の知識を学ぶだけでなく、「伝統の精神を受け継ぎつつ、自ら考え、周囲と協働して地域を守る当事者となる力」です。中学生を例に考えてみましょう。

- ◆ スマホなどで得た気象情報を家族に共有し、避難のきっかけを作る子
- ◆ ハザードマップを熟知し、地域の危険な場所を自分の言葉で語る子
- ◆ 「自分さえ良ければ」ではなく、流域全体や地球規模の環境にまで目を向けられる子 など

決して特別なことでなくてもよいのです。「日常のなかで、自分にできる一歩を踏み出せるこどもたち」を、見附のすべての学校、すべての先生方の手で育てていきましょう。先人が力を結集して「龍」と戦い、守り抜いてきたこの郷土のバトンを、次の世代へと確実につなぐために、日々の教育活動を通じてともに歩んでいきましょう。(ま)



運動感覚の獲得Ⅳ ～身体コントロール能力の発見～

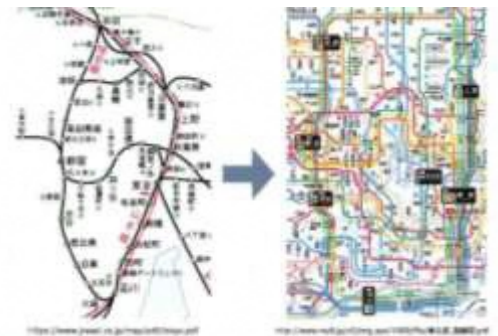
講師:伊藤 巨志 氏 (新潟県立大学教授)

本研修は、「導入(ミニ講座)」「身体を動かす実習」「まとめ」の3部構成で行われ、受講者は体験を通して幼児・児童期における多様な運動経験と神経回路の形成への理解を深めました。

1.【導入】発達に応じた運動の在り方と「神経回路の形成」

前段のミニ講座では、運動能力の構造と発達段階に応じたアプローチの重要性が示されました。運動能力は、筋力や持久力といった「運動体力(エネルギー生産性)」と、身体を器用に動かす「運動コントロール能力(調整力)」の2つに大別されます。青年期(女子は小学5年生、男子は中学1年生頃が変わり目)以降は体力の向上が顕著になりますが、一方で幼児・児童期は「運動コントロール能力」を養う極めて重要な期間となります。

この時期に多様な運動を経験することは、脳と身体をつなぐ「神経回路の形成」を促します。講師はこれを「東京の鉄道網」に例えて説明しました。かつては数路線しかなかった路線網が、地下鉄の発達によって遠回りや乗り換えなど無数のルートを持ったように、幼児・児童期に多様な動きを経験することで、脳内に複雑で柔軟な神経回路が作られます。これが「運動神経のいい子」を育てる確かな土台となります。



2.【実習】知覚と運動をつなぐ多彩なアプローチ

- ① 予測とタイミング……「拍手」を用いた運動
- ② 仲間作り……じゃんけん等を用いた「ペアづくり」
- ③ 感覚への気づき……「ラジオ体操」「目を閉じて片足立ち」「超スロー歩行」「利き手じゃない動き」
- ④ バランス・姿勢……足裏や体幹を意識する「ペア押し合い」
- ⑤ 力加減の制御……風船や紙・廃材を使った「風船コントロール」

実習を通して、姿勢保持には足裏の感覚や体幹の調整が不可欠であることや、「強い力を出す」こと以上に「適切な力に加減する」ことの難しさと大切さを学びました。

3.【まとめ】こどもの「遊び」は感覚統合学習の場

最後に、日常の「遊び」こそ最高の身体コントロール学習だと総括されました。例えば、「はいはい」は左右の協調性と体幹を育て、「鬼ごっこ」は予測や方向転換の能力を養います。「身体を動かす」とは、単に筋力を発揮することではなく、視覚や触覚などの感覚を使って動きを「調整」することです。指導者がこの視点を持ち、日々の保育や体育に多様な動き(あそび)を取り入れていくことの大切さを全員で共有し、充実した研修を締めくくりました。

感想

今回は、様々な校種・職種の先生方 28 名からご参加いただきました。

1. 研修会での主な学び・気付

- 「運動能力」の本質と感覚への理解
 - 「運動能力＝スポーツが上手にできる能力」ではないということ。普段の何気ない動きの中に「感覚と運動のつながり」や「コントロール能力」が隠されていると知った。
 - 遊びを通して感覚を育てること(感覚統合学習)の大切さが、実体験を通して非常によく理解できた。
- こどもたちの現状と課題へのアプローチ
 - 近年、メディア漬けによる体の硬さ・不器用さ、体幹の弱さからくる姿勢保持(座位の維持)の難しさを抱える子が増えているという実態を再確認した。
 - 手を前につくために「ハイハイ」や「くまあるき」といった手をつく遊びが非常に有効であると分かった。
- 指導の工夫とアプローチ
 - ねらいを持ちつつもパターン化させずに、様々な動きを取り入れることの大切さを学んだ。ペアの組み方ひとつにとっても、授業づくり・集団づくりの参考になった。



2. 「明日からさっそく実践したい！」具体的なアイデア

- 保育園・幼児教育
 - すでに歩行している年齢であっても、あえて「ハイハイ運動」などを取り入れ、楽しみながら体を動かす経験をたくさん積ませたい。
- 小学校(体育・体づくり運動)
 - 体育の時間の導入や「体づくり運動」として活用したい。
 - 人数分ボールがなくても、廃材を使って握力をつける等、工夫して手を使う運動を取り入れたい。
- 特別支援学級・通級指導教室
 - 力加減の調整(コントロール)が難しい子、支援学級のこどもたち、あるいはボールの動きに合わせられず自信をなくしている通級の子と一緒に、風船などを使った活動を楽しく取り入れたい。

3. 講師への感謝と全体の雰囲気

- 「60 分という短い時間だったが、大人自身が童心に帰って夢中で楽しめた」「あっという間の楽しい時間で、ストレス解消にもなった」という声が多数寄せられました。
- 自分自身の身体コントロールの難しさに気づかされたという先生も多く、終始笑顔あふれる、活気ある学びの場となりました。

成果と今後の展望

運動能力の本質が「五感で身体を調整する力」であるとの共通認識が、校種を越えて深まりました。体幹の弱さや不器用さといった現場共通の課題に対し、風船や廃材を使った「力加減の制御」や、歩行期における「ハイハイ」の有効性など、明日からすぐ使える具体的なアプローチを受講者が獲得できたことは大きな成果です。

今後は、各園・学校の日常の保育や体育の導入でこれらの「運動遊び」が日常化され、こどもたちの健やかな神経回路の形成を促すことが期待されます。また、「姿勢保持が難しい子」へのアプローチなど、現場の具体的なニーズに応える継続的な研修の充実と、幼小の円滑な接続を見据えた指導法の発展を目指します。



特別支援教育 はじめの一步 ～見方を変える「困った子」から「困っている子へ」

講師：見附特別支援学校 長谷川 徹 氏

見附特別支援学校校長の長谷川氏を講師に迎え、「特別支援教育 はじめの一步」と題し、特別支援教育の基本理念と、こどもたちを正しく理解するための具体的な視点について学びを深めました。

講義の前半では、特別支援教育の歴史と今後の方向性が示されました。従来の「特殊教育」が「障害による「教育の場」の分け」であったのに対し、現在の「特別支援教育」は通常の学級も含め「個のニーズに応じた指導・支援を行う」ものへと転換されました。

さらに、これからのインクルーシブ教育について「特定の形を作るのではなく、多様なこどもたちの存在を前提に学校のシステムそのものを柔軟に見直していくプロセスである」と述べ、すべての児童生徒のウェルビーイングを目指す重要性を強調されました。

後半は、通常の学級における実践的なこども理解に焦点が当てられました。

学級内に一定数存在する支援を要する児童生徒の姿(立ち歩きや暴言など)に対し、表面的な行動だけで判断せず「冰山モデル」のように水面下にある「見えない困り感(感覚過敏や不安、言語理解の難しさなど)」に目を向ける視点が提示されました。

そして、「大切なのは、障害名や偏見でこどもを縛るのではなく、一人ひとりの客観的な事実から「どのような困難を抱えているのか」という仮説を立て、それに沿った支援(活動の時間を短く区切る、安心できる環境を整えるなど)を試みることです。1回で成功しなくとも諦めず仮説を立て直していく、その手続きの積み重ねこそがこども理解の基盤である」と語られました。



今回の研修は、事例検討を通じた具体的なアプローチを学ぶとともに、教育に携わるすべての者が、誰もが安心して学べる学校づくりを進めていくための原点に立ち返る貴重な機会となりました。

感想

放課後児童クラブ職員を含む様々な校種・職種の先生方 34 名からご参加いただきました。

「見方」が変われば、関わりが変わる！

- 『困った子』ではなく『困っている子』という言葉が、とにかく心に刺さりました。問題行動にばかり目を向けず、その背景にある理由にしっかり思いをめぐらせたいです。（保育園）
- 目の前に園児の姿が浮かび、涙が出そうに。こどもたちの困り感に寄り添い、どの子も安心して過ごせる居場所をつくっていきたいです。（子育て支援センター）
- 障害を見るのではなく、人を理解すること。最近、こどもたちの声に、つい声を出して抑え込もうとしていた自分を深く反省しました。その子の原因(水面下の困り感)をしっかり見取ります。（小学校）



明日からの実践！私のマニフェスト

- 『支援は甘やかashiではない』という先生の言葉に、迷っていた背中を強く押してもらえました。今頭に浮かんでいるあの子のために、粘り強く向き合います。（児童クラブ）
- どの子にも分かりやすい『視覚的支援』や、短く具体的な説明を意識していきます。『自分でできた！』という感覚をたくさん味わわせてあげたいです。（小学校）
- 『安心できる』『100点じゃなくても大丈夫』。そんな気持ちを、感情への支援としてこどもたちにしっかり言葉で伝えていこうと思います。（小学校）



チームで、そしてみんなで支え合うために

- 事例を言葉で整理していくと、漠然とした悩みがスッキリしていくのを感じました。学校に戻ったら、周りの職員やサポートスタッフと意見交換を大切にします。（小学校）
- インクルーシブ教育は本当に根気のいるものだと言感。でも、本人(児童)はもっと大変な何かに困っているはず。チームで仮説を立て、試行錯誤を恐れずにトライします。（小学校）
- 一人一人に応じた丁寧な支援をするためにも、現場のマンパワーや心理的なゆとり、人的環境の改善がもっとも必要だと、リアルに感じました。（特別支援学校・小学校）

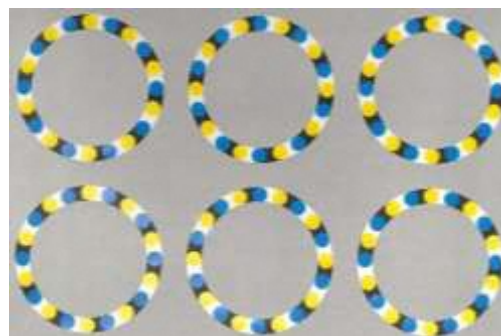


成果と今後の展望

本研修の成果は、教員や支援員が「障害ではなく人を理解する」姿勢を共有し、こどもの困り感に寄り添う多様な仮説検証や視覚的支援などの具体策を得た点にあります。

今後の展望として、研修で得た学びを各校・園に持ち帰り、チームやサポートスタッフとの情報共有を強化していくことが期待されます。

7月 科学教育部



タックシール(青、黄)を貼るだけの回轉錯視
(少し回って、止まるを繰り返します。)

【ここまでの活動の様子】

【こども向け科学イベント】 第2回 土曜こども科学教室 (6/13(土))

今年度は、土曜こども科学教室を4回実施する予定です。第2回は「おいしい実験」と題し、ポップコーンがはじけるようすを観察したり、フルーツあめ作りに挑戦したりしました。当日は、6名の児童とその保護者の方が参加し、理科室にある実験器具を使って、お菓子作りを行いました。ポップコーンがはじける瞬間に歓声を上げたり、砂糖が融けてフルーツあめができる様子を興味深く観察したりしていました。次回は、8月22日(土)に予定しています。



【単元別研修会】 科学研究の進め方 (7/2(木))

科学研究の指導のポイントを確認した後、参加者はグループで科学研究に取り組みました。サイコロを題材に実験やデータ整理を行い、科学研究のプロセスを体験しました。参加者が楽しみながら試行錯誤する姿が印象的でした。

参加者からは、

「科学研究の面白さを実感できた。」

「生徒への支援のポイントが分かった。」

「科学的な過程を楽しむことの大切さを学んだ。」

などの感想が寄せられました。



紙製のサイコロ



【 7～9 月の 研 修 案 内 】

1	「野外研修会」 (アリに関する実習)	7月31日(金) 9:30～11:30 (雨天の場合は中止) 集合:市民の森の駐車場	身近な昆虫である「アリ」の採集 の仕方・種同定の視点・標本の作 り方に関する実習を行います。	参加者 1名
2	単元別研修会 「月の満ち欠けの探究」	9月3日(木) 15:40～16:40 9月4日(金) 15:40～16:40	月の満ち欠けに関する実習を行 います。実際に月の満ち欠けを 学習する単元で活用できる教材 を使いながら、グループで課題 に取り組んでいただきます。「天 体の学習で活用できるグッズ」 をお持ち帰りいただけます。	参加者 4名 参加者 6名

※研修会の申込については終了していますが、開催予定の研修会に、新たに参加を希望する方は、見附市教育センター科学教育部まで電話またはメールでお申し込みください。歓迎いたします。

科学の公園

科学研究指導の一例 ～どうしたら、パリッと食感のバナナ飴を作ることができるのだろうか?～

これからお祭りの季節ですね。お祭りで見かけるりんご飴をヒントに、科学研究の練習としてバナナ飴作りを探究しました。砂糖を加熱して作った飴をバナナに絡めると、パリッとした飴の食感とバナナの甘さが楽しめます。しかし、バナナから出る水分の影響で飴がうまく固まらず、ねっとりとした仕上がりになることがあります。そこで、パリッとした食感にならなかった先行研究を参考に条件を見直し、実験を重ねました。その結果、理想的な食感のバナナ飴を作ることになりました。

今回の探究を通して、失敗例を手がかりに条件を制御しながら課題を解決していく、科学研究の面白さを体験することができました。



TeaRoom 内の「理センコミュニティ」をご活用ください！

<理センコミュニティの参加方法>

- ①新潟県立教育センターの HP などから TeaRoom にログインする。
- ②一番上の「コミュニティ」から、「理セン 授業・教材 アイディア集」を検索する。
- ③「コミュニティに参加」を押す。
- ④トピック一覧から資料を探す。



Tea Room 内のコミュニティ

「理セン 授業・教材アイディア集」

例えば、次のような資料があります！

- ・蒸留実験におけるエタノール量を数値化する方法
- ・袋栽培のジャガイモを利用したでんぷんの抽出実験
- ・塩酸にアルミニウムを溶かす実験を早く終わらせる方法
- ・「月の観察」への意欲を喚起する『月齢カレンダー』
- ・安価で容易に作製できる望遠鏡

今すぐチェック！